

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一 2:1～5 「宣教と力」

[1-2]「さて兄弟たち。私があなたがたのところへ行ったとき、私は、すぐれたことば、すぐれた知恵を用いて、神のあかしを宣べ伝えることはしませんでした。なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです」

当時コリントの町には雄弁や哲学によって人々に教え、それで生活している人々が多くいた。パウロが彼らと同じ方法で語るならば、人々は新たな哲学者が一人増えたくらいにしかならなかつたろう。それで彼はイエス・キリスト、それも十字架につけられたイエス・キリストを単刀直入に宣べ伝えたのである。彼はこの方法が最も良いことを知っていた。それはまた別の面から言えばコリントではまだキリスト教の福音全部を説くことはできないほど肉体的であり、この世の知恵、力に頼っている状態であったからと考えられる。肉というものに対してはまず十字架の福音が語られる必要があった。さらに言うならば、当時の人々が抱いていた救い主の観念とは全く違う十字架につけられた救い主が最初に提示されなければならなかつた。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでもコリントではそれがまず第一に必要なとされたのである。

[3]「あなたがたといっしょにいたときの私は、弱く、恐れおののいていました」

この「弱い」とは肉体的な弱さのことではなく、内面的な状態のことであり、その結果として恐れおののいているのである。もちろんこれは弱気とか臆病というものではない。神から与えられた大きな責任を果たそうとするがゆえの恐れおののきであった。あらゆる肉欲が渦巻いている大都市コリントでの伝道において、震えおののくほどの弱さと恐れ、自覚、自信の欠乏。これはまたすべて伝道にたずさわる者が多かれ少なかれ感じることであり、それがまた上から受ける力の秘訣ともなる。→Ⅱコリント12:9～10

[4-5]「そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵のことばによって行われたものではなく、御霊と御力の現れでした。それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした」

パウロは説得力はあるかもしれないが常に揺れ動く人間の知恵ではなく、御霊ご自身、またしるしと奇跡を伴う神の力によって福音を宣べ伝えた。人格が変えられること、聖められること、救われること。これらのことにおいてたしかに御霊が働いておられ、神の御力が現されていることがわかる。

パウロはコリントの人々の持つ信仰が人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるために努力した。すぐ倒れてしまうような人間の知恵の上ではなく、神ご自身の上に建てられた信仰。このような信仰こそいつまでも続くものなのである。